中國詩文論叢　第十四集

明代傳奇における才子と佳人

――一夫兩妻の趣向をてがかりに――

岡崎由美

一

明末清初才子佳人小説は、主人公たる才子の科擧における出世と、佳人との配偶姻縁を描く白話小説であり、一ジャンルを形成するかなり強固な構造的パターンを持っている。

それは、異なる作品の中に重複して現れる趣向―科擧の不正、悪人が主人公の名をかたる、偽名によるすれ違い、佳人の男装による配偶の混亂等―から、一讀して同工異曲の感を覺えせしめるものである。(1) その中でも、このジャンルを特徴づけている最たるものは、『玉嬌梨』の別題にも用いられている「雙美奇縁」即ち、一人の才子と二人の佳人の姻縁撮合を描く物語構成で、その趣向は、才子が二人の佳人を同時に妻とするため、雙嬌齊獲(2)と呼ばれる。

これは、もちろん、幾つもの作品に共通する顯著な趣向であるというのみならず、ストーリーの展開、プロットの付隨的趣向―片方の佳人の男装、女同士の偽装結婚、妹の縁談と稱する男装の佳人の求婚―や、キャラクターの關係設定が、この男一人女二人の三角形を起點にして立ち上がると言っても過言ではない。

換言すれば、明末清初の才子佳人小説に分類されている作品群の中に、この構造的特徴が目立って集中しているという點が、當該ジャンルを時代の流行たらしめている一要素なのである。

時代の流行を言うなら、それは、同時代の他のフィールドにも關わってくる。娯樂文藝のもう一方、戯曲である。とりわけ、「傳奇十部九相思」といわれた傳奇は、夫婦の悲歡離

合や才子佳人の配偶姻縁が主流である。才子佳人小説が釀成され、文藝上の流行として定着する流れの中で、明代の傳奇はどうしていたのか。

本稿では、才子佳人小説を代表する趣向、雙嬌齊獲を手がかりに、明代傳奇、特に才子佳人小説定着以前の傳奇について考察してみたい。なお、ここでの雙嬌齊獲は、とりあえず、「一人の才子と二人の佳人の姻縁（雙美奇縁）に基づく一夫兩妻成親の趣向」という定義のみとし、それ以上の設定の差異は、個別に言及することとする。

二

まず、才子佳人小説において代表的趣向である雙嬌齊獲は、異なる文藝形式の戲曲においても、才子佳人物語を考える指標になりうるか、という點を檢證しておかねばなるまい。即ち、明傳奇の中に、雙嬌齊獲が、それなりの特徴として見受けられるか、ということである。

刊刻年について、現存する版本と戲曲書目類の著錄に基づく限り、泰昌・天啓以降の明清傳奇中には、姚子翼『遍地金』、阮大鋮『燕子箋』、李玉『永團圓』、朱佐朝『双和合』、劉方『天馬媒』などが見受けられる。

例えば、清初の戲曲家と見られる劉方の『天馬媒』は、主人公黄損が、玉馬墜の縁で商人の娘裴玉娥と妓女薛瓊瓊を娶る。これは、馮夢龍『醒世恒言』第三十二卷『黄秀才徼靈玉馬墜』に基づくものであるが、『醒世恒言』では、薛瓊瓊は黄損の妻とはならず、黄損とヒロイン韓玉娥一對の男女の姻縁が描かれている。傳奇は、これを雙嬌齊獲の方向へと改編している。

また、清初の朱確の『翡翠園』も、最後に舒芬が、深窓の佳人麻翡英（正旦）と俠女趙翠兒（貼旦）を共に娶る物語であるが、テーマ自體は、才子佳人の要素が薄い。第一に通常主役を張る生は、舒芬の父舒德溥に當てられている。舒芬は小生である。

役柄から言って、父と息子が生と小生に當てられるのは、相對的に不思議はないが、あくまで青年舒芬を主役におくなら、その父を外または末といった脚色（役柄）に振り當てる手段もあったであろう。實際、この作品では、生の舒德溥の登場齣數が壓倒的に多く、舒芬は、途中で身を隱すというストーリー展開に基づき、第八齣から第十五齣まで登場しない。この閒は、生が舒德溥以外の役を演じないのに對して、小生は、人手の必要な幕では、院子、家丁、公差といった些

末な役に借り出されている。

物語の内容においても、縷々描かれるのは、悪人麻逢之の陰謀によって陥れられて、なお節を曲げぬ舒德溥の氣骨と、舒德溥を恩人と仰ぐ王饅頭（丑）の苦心や、舒家に仕える俠女趙翠兒の忠義立てなのである。むしろ俠義ものに分類した方がよかろう。

才子佳人ものに必須ともいえる結婚の約束もないし、基本的に舒芬と二人の佳人の姻縁のプロセスは、一切描かれていない。そもそも才子佳人の物語は、心の内で誓い合った男女、即ち少なくとも心情的には既に夫妻の男女が悲歡離合を經て、正式な婚禮を擧げるまでを描く。この作品には、その男女の悲歡離合が全く描かれていないのである。

ところが、大團圓に至って、小生扮する舒芬は唐突に雙嬌を獲得する。正旦扮する麻翡英は敵役麻逢之の娘であり、舒家に同情的な設定とはいえ、最後に父親が罪を得て行き場所が無くなったから舒芬にめあわせるという成りゆきは、豫定調和的大團圓を身上とする才子佳人物語の中でも、強引な結末といわざるをえない。

即ち、この唐突にして強引な雙嬌齊獲は、大團圓の一部としての雙嬌齊獲が約束事として先にあることを示していよう。

阮大鋮（一五八七―一六四六）の『燕子箋』傳奇はこれと對稱的に、才子霍都梁（生）と二人の佳人酈飛雲（正旦）・華行雲（小旦）の姻縁を軸に、才子佳人小説お馴染みの趣向が滿載されている。

（1）敵役鮮于佶が、科擧の答案を主人公霍都梁のものとすり替える（冒犯姓名）

（2）姻縁の契機であり成親の證據となる詩詞（燕子箋）

（3）名前の取り違え（人物認定の混亂）

a、二人の佳人酈飛雲と華行雲がどちらも「雲娘」であること。

b、霍都梁が僞名を使うこと。

c、華行雲が酈飛雲の兩親の義女（酈小姐）となり、酈飛雲が賈南仲の義女（賈小姐）となる。このため、鮮于佶は相手が顔見知りの華行雲とは知らずに「酈小姐」に求婚して馬脚を現し、一方、霍都梁と酈飛雲は、お互いに相手が自分の心寄せる人であると知らず、縁談を斷りかける。

（4）二人の妻の立場について、「一様相稱」が強調されていること。才子佳人小説では、二人の佳人が、決して妻妾

ではないところがツボである。また、「一様相稱」は、婚姻の約束は華行雲と先にしておきながら、正式な婚禮は酈飛雲と先に擧げてしまう霍都梁の免罪符としても使われている。

才子佳人小説では、この平等性を徹底させるゆえか、才子は一般に二人の佳人と同時に婚禮を擧げる。『燕子箋』の最終幕第四十二齣では、二人の佳人が、夫婦の誓いが優先するか、正式な擧式が優先するかで、誥封の拜受をめぐって爭う。この婚姻時期のずれは、『燕子箋』だけの特殊な例ではない。これについては、後で述べたい。

(5) 狀元となった霍都梁の正夫人に賜る誥封が二通下され、お上の權威によって双嬌齊獲が保證される（奉旨歸娶）。(4)の趣向の補强である。

これらの趣向は、才子佳人小説ではよく見られるものであり、『燕子箋』の才子と二人の佳人がたどる複雜な流轉の運命も、才子佳人小説のストーリー展開のツボによく合致している。とりわけ、雙嬌齊獲を支える「一様相稱」、二人の佳人に上下の別無しとする世界觀は、元末明初・高明の南戲『琵琶記』の蔡伯喈が牛丞相からの緣談を拒みに拒んだ末屈服するという展開に比べると、實にあっさりと霍都梁を「賈小姐（酈飛雲）」との結婚へ進めてしまう。これも、雙嬌齊獲が、もはやさほど言い譯を必要としない枠組みとして、導入されている傍證と見ることが出來よう。

以上のような例から、明末清初の傳奇でも雙嬌齊獲の趣向は、パターン化した作劇術の一つとして、機能していたことが分かる。

明末清初の才子佳人小説は、作者の同定も執筆・刊行時期の認定も極めて困難であるが、小説と戲曲の現存の版本を比べた限りでは、雙美奇緣傳奇群の（群としての）出現は、小説における雙美奇緣パターンの定着よりも、些か時期が早いように見受けられる。但し、これは、小説が詞曲よりも文藝上の評價が低く、讀み棄ての對象として、版本が殘りにくかったことも考慮に入れねばなるまい。

三

傳奇の雙嬌齊獲は、一人の才子が二人の佳人を妻にする、という定義付けにおいて、小説と同一の趣向であり、物語の

展開やキャラクターの人閒關係を設定する一つの世界觀であるが、その具體的な現れ方には、相違點もある。

一つは、才子佳人小說の雙嬌が、しばしば男裝という趣向を伴い、「深窓の佳人」と「男裝の佳人」という人物描き分けのパターンを呈するのに對し、傳奇の方では、「冨貴の佳人」と「貧賤の佳人」という身分の描き分けが伴うことである。

小說の二人の佳人は、おおむね衣冠、書香の家柄である。物語の展開上一時的に貧賤に身を落とすことはあっても、少なくとも二人の閒に社會的階級差が大きく意識されないように出來ている。美貌、詩文の才、いずれも甲乙つけがたい二人の佳人は、片方が深窓にこもった令孃であり、片方が男裝して世閒を飛び歩く活發な令孃という點で、人物設定の差異を特徴づけている。

一方、傳奇の場合は、片方が一般庶民の娘であったり、『天馬媒』や『燕子箋』のように妓女であるケースも珍しくない。

もう一つは、先に觸れたように、傳奇の場合、片方が一足早く正式な婚禮を擧げている場合が多いことである。小說では、最後の大團圓で先に約束した方を嫁迎えに行き、それから後で約束した方と二度目の洞房華燭という段取りの時差はあるが、二人の佳人は、辛抱强く最後まで平等に才子の迎えを待つのである。片方の行方も知れぬうちに、もう片方と婚禮を擧げてしまうというケースは、傳奇の特色である。卽ち、物語の時閒軸で、二人の佳人の閒に未婚と旣婚の差が現れる。

先に述べたように、齊獲とは、嚴密に言えば、時閒的にも身分的にも二人の佳人が竝び立って才子のものとなることであり、婚姻に時閒的前後や身分の上下はないのである。そうすると、この二點において、傳奇の雙美奇緣は、小說と趣向が大きく異なる。『燕子箋』の「一樣相稱」や「誥封二分」は、そうしたずれからくる、一種のすりあわせと考えられる。

傳奇では、たいてい最終幕で敕使が現れ、作劇上、主人公の功績を稱え、苦勞を慰撫することで、これまでの物語のまとめを行う。物語上では、二人の佳人の人閒關係―婚禮の前後や身分の上下による妻妾の別はないこと―を保證するのである。これは卽ち、小說の奉旨歸娶（結婚に敕許を得る）による雙嬌齊獲に代替されるものである。

この二點を踏まえた上で、傳奇の雙嬌齊獲への歩み寄りを

もう少し遡ってみたい、嘉靖、萬曆時期である。

才子佳人小説にとって、この時期は既に出現の上限ぎりぎりといってよかろう。小説の版本には原刊本の存在の問題がついて回るが、早期の才子佳人小説とされる[3]『吳江雪』、『玉嬌梨』、『春秋配』、『平山冷燕』にしても、現存刊本は早く見積もって清初のものとされ、明版は發見されていない。初刻あるいは執筆は明代に遡るとして、少なくとも雙嬌齊獲、佳人男裝の趣向を備えているのは『玉嬌梨』のみであり、『吳江雪』、『風流配』は一對の男女、『平山冷燕』は一對の男女の姻緣を描いたもので、この時期、雙嬌齊獲は未だ十分に定着してはいない。

なお、清初刊と推定される[4]中編白話小説集『人中畫』所收の『風流配』も雙嬌齊獲、佳人の男裝が見られる。從って、雙嬌齊獲の上限は、この『風流配』、『玉嬌梨』あたりと想定されよう。

この時期の明傳奇で雙美奇緣の枠組みを持つものに、『高文擧珍珠記』(佚名)、『玉環記』(六十種曲本では、楊柔勝とする)、謝讜『四喜記』、無心子『金雀記』、心一山人『何文秀玉釵記』があげられる。これらは、

1、萬曆刊本の現存するもの

『珍珠記』、『金雀記』、『玉釵記』、『玉環記』

2、著錄類

徐渭『南詞敍錄』:『珍珠記』

呂天成『曲品』:『四喜記』、『玉環記』

祁彪佳『遠山堂曲品』:『珍珠記』、『四喜記』、『金雀記』、『玉釵記』

という狀況から、ほぼ萬曆以前の作品群と同定できよう。『珍珠記』は、徐渭の『南詞敍錄』という、明の傳奇論著としては早期の著作に『高文擧』の題名で見え、また、『玉環記』も、六十種曲本では萬曆期の戲曲作家楊柔勝としているが、呂天成の『曲品』では、「舊傳奇」の部に著錄している。現存の『珍珠記』と『玉環記』が、この著錄された明初南戲と同一のものかは、判定が困難だが、こうした舊傳奇に手を加えたものという可能性は十分考えられる。

このように、明末清初才子佳人小説成立以前に、明傳奇の中では、具體的な設定は異なるものの、雙美奇緣のパターンが出來ているのである。

そこで、先に擧げた小説との二つの相違點①二人の佳人の階級差、②婚姻の時閒的ずれをたどってみたい。

まず、才子と二人の佳人の人物設定と脚色（役柄）について見てみよう。二人の佳人の階級差については、相對的により家柄・地位の高い方を「冨貴の妻」とし、低い方を「貧賤の妻」とする。

『高文擧珍珠記』
高文擧（生）：才子。
王金眞（正旦）：地主の娘。「貧賤の妻」
溫小姐（貼旦）：溫閣老の次女。「冨貴の妻」

『玉環記』
韋皐（生）：才子。
張瓊英（正旦）：西州節度使張延賞の娘。「冨貴の妻」
玉簫（貼旦）：平康坊の妓女。轉生して西州副節度使姜承の娘簫玉。「貧賤の妻」

『四喜記』
宋祁（小生）：才子。
鄭瓊英（正旦／貼旦）：鄭參政の娘。宋仁宗の宮人。「冨貴の妻」
董青霞（小旦／貼旦）：教坊の妓女。「貧賤の妻」

『金雀記』
潘岳（生）：才子。
井文鸞（正旦）：井王孫家の令嬢。「冨貴の妻」
巫彩鳳（貼旦）：教坊の妓女。「貧賤の妻」

『玉釵記』
何文秀（生）：才子。
王瓊珍（正旦）：王太師の令嬢。「冨貴の妻」
劉（張）月金（小旦）：南京鴛鴦巷の妓女。「貧賤の妻」

このように見ると、由緒正しい家柄の娘（正旦）に對して、妓女（貼旦或いは小旦）が配されるというパターンの中で、『珍珠記』のみが、庶民の妻（正旦）に對して、權門貴顯の妻（貼旦）を配す形態を呈している。そもそも『珍珠記』は、この庶民の妻が主人公の糟糠の妻であり、權門の妻は、狀元合格によって押しつけられたものである。嚴密に言えば、「齊獲」とは言いがたい。

物語は、糟糠の妻が夫を訪ねて上京し、權門の妻に虐待される苦勞話を描いたもので、大團圓の結末では、糟糠の妻が權門の妻に仕返しせんとする場面もある。才子佳人小説の仲の良い佳人たちとは似ても似つかない。この「冨貴の妻」はほとんど惡役であり、ヒロインを演じる正旦を配すはずはないのである。

一方、冨貴の妻（正旦）に妓女（貼旦）が配されるパターンの場合、良家の子女たる正旦は、物わかりがよい。先に述べた明末清初の雙嬌齊獲戲曲と合わせ見ると、これ以降、このパターンが主流になっていくようである。

傳奇の雙嬌齊獲が、小說ほど二人の佳人を平等に描けないのは、脚色（役柄）が介入するからであろう。正旦は劇中の女主人公であり、貼旦はこのランク差を超えない。

傳奇の脚色は、『南詞敍錄』に、「生、旦、外、貼、丑、淨、末」の七つが擧げられ、やや下って王驥德の『曲律・論部色』では、

今之南戲、則有正生、貼生（或小生）、正旦、貼旦、老旦、小旦、外、末、淨（卽中淨）、丑（卽中淨）、小丑（卽小淨）、共十二人、或十一人、與古小異。

とあり、この時期の脚色の細分化が見てとれる。貼旦については、『南詞敍錄』に「旦之外貼一旦也」とあり、『曲律・論部色』では、「其貼則旦之佐」といい、正旦に次ぐ役割であったことが分かる。

この脚色の點で目立つのが、『四喜記』である。この作品には、生、小生、旦、小旦、貼旦、外、淨、末、丑、九種の脚色が使われているが、その割り當てが實に不安定で入り亂れているのである。

全四十二齣のうち、第三十三齣までは、貼旦が、鄭瓊英と董青霞をめまぐるしく交替で演じる。雙嬌齊獲傳奇において、二人の佳人を同一の脚色が演じるという例は、他に見られない。第三十四齣から三十六齣までは、小旦が董青霞を演じる。また、第三十四齣では、小旦＝董青霞、貼旦＝鄭瓊英であるのに、第三十六齣では、旦＝鄭瓊英、小旦＝董青霞となる。また、第三十九齣では、貼旦、小旦、として登場してきた鄭英と青霞が、退場前の卜書きでは旦と小旦となっている。

この原因については、以下のようなことが考えられる。

1、物語構成の問題。登場人物の整理がうまくいっていない。この作品は、本來、宋元戲文にある『宋子京鷓鴣天』（宋祁の宮女獲得譚）と元明雜劇にある『宋庠渡蟻』（佚。宋祁の兄の狀元合格因緣譚）を合體させたもので、しかも雙嬌齊獲が導入されているため、とにかく脚色に對して登場人物が多すぎる。

旦角に限っていえば、生旦は、宋祁の兄宋郊（生）の妻

孫氏が優先權を持ってしまい、他に董青霞の姐分の妓女董鶴仙、劉娘娘、皇太后を演じる。孫氏と鄭瓊英は、おのおの獨立したプロットでは、いずれも正旦が演ずべき中心人物であり、それゆえに登場回數も多く、これ以上正旦が負擔する餘裕はない。そこで、脚色不足による代替措置として、鄭瓊英が正旦に次ぐ旦角の貼旦に退き、本來貼旦の位置にある董青霞と兩方の役を兼ねざるを得なくなった。

しかし、この場合、疑問點もある。登場人物過多による脚色不足とは言いながら、せっかく導入した小旦は、第三十三齣まで、ほとんど出番がないのである。この間、鄭瓊英と董青霞は、貼旦が一手に引き受けている。當時の劇團に貼旦を擔當する俳優が何人いたかは分からないが、鄭瓊英が貼旦に退いた以上、董青霞を小旦に任せきりにしてもよさそうなものである。

2、人物造型の問題。登場人物の設定において、鄭瓊英と董青霞二人の佳人の作劇上の機能的個別化が確定されていない。卽ち、とりあえず二人の佳人を絡ませるという趣向のみが先行してしまった。この作品の小旦は、他に王則の亂の妖女胡永兒が配されている。胡永兒と佳人二人の差異の方が、鄭瓊英と董青霞の差異よりも大きかった。このため、「良家の子女」、「妓女」という物語上異なる性格も、正旦＝孫氏の設定下で、正旦に次ぐ機能のキャラクター（小生をとりまく佳人）として一括りにされてしまい、異なる脚色がそれぞれに一貫して獨立分擔する必然性が認識されなかった。

3、脚色の區別の問題。脚色の細分化がまだ十分に定着しておらず、小旦と貼旦の屬性上の分化が明確ではない。王安祈『明代傳奇之劇場及其藝術』[5]では、明傳奇の小旦と貼旦は、小旦が若い女性に限られるのに對し貼旦に年齡制限は無いこと以外、明確な區別は無い、と解說する。從って、貼旦が若い女性に扮する時は、小旦と全く同じであり、『霞箋記』の張麗容（正旦）の妹が、劇の途中で小旦から貼旦へ變わっている例を擧げる。董青霞が貼旦になったり、小旦になったりする點は、これで說明がつくであろう。第三十四齣以降、董青霞が小旦に移行するのは、鄭瓊英と董青霞が同席する場面が出てきて、控えとして代替されたと考えられる。

2と3は、相互に關連する問題である。なお、嘉靖・萬曆期の傳奇は、一人の才子が複數の佳人を戀愛遍歴のすえ妻妾にする趣向の長編傳奇小說を戲曲化している。これらの傳奇小說は、萬曆年閒以降に刊行される通俗類書に、續々と收錄されることになるが、それ以前に單刊發行もされていた形跡がある。これらの戲曲化作品は、當然ながら異常に女性の登場人物が多くなってしまうらしく、『遠山堂曲品』では、小說『天緣奇遇傳』に基づいた程文秀の『玉香記』について、

但爲子輶妾者、玉勝而下、尙四五人、不特場上不可演……

と評している。卽ち、小劇團では扱いきれぬほど、旦角は役を取り替えねばならなかったようである。こうした背景も考慮に入れられるであろう。

次に、婚姻の時閒的ずれであるが、『四喜記』、『玉環記』、『玉釵記』では、結婚の誓いは「卑賤の妻（妓女）」の方が先、實質的な結婚は「富貴の妻（令孃）」の方が先である。一方、『金雀記』では、令孃と結婚した後に、初めて妓女に出會う。『金雀記』の場合、優位に立つのは、明らかに「富貴の妻」の方であり、實際、第十六齣で、妓女巫彩鳳を聚った潘岳は、「不料筵閒又得巫彩鳳爲妾」と側妾であることを明らかにしている。この發想は、むしろ前述の長編傳奇小說に近いであろう。

これは、『燕子箋』があくまで「一樣相稱」を强調し、狀元夫人の誥封を二通下賜するといった趣向とは對照的である。卽ち逆算すれば、「卑賤の妻」に結婚の誓いを優先させ、「富貴の妻」に實質的結婚を優先させるのは、妻妾の別のない雙嬌齊獲の方向へ向けて、二人の佳人の力學的均衡を取ろうとしているのである。

なお『玉環記』、『玉釵記』には、「誥封二分」の趣向も現れている。また、『玉環記』に先行する同一題材の元雜劇『玉簫女兩世姻緣』では、張瓊英は登場せず、玉簫の轉生は張延賞の養女で樂戶の出身となっており、『玉環記』はこれを雙嬌齊獲へと改編した際、玉簫を副節度使姜承の實の娘とした。身分の引き上げを行ったのである。これも、雙嬌齊獲の平等性へ向けての動きと解しえるであろう。

以上のように、明傳奇は、萬曆頃には、「才子（生）―富貴の妻（正旦）―卑賤の妻（貼旦或いは小旦）」というコン

ビネーション下で、妻妾の別の無い雙嬌齊獲を形成しつつある。

四

傳奇の双美奇緣物語は、なかなか小説式の雙嬌「齊獲」を用いない。妻妾上下の別無しという點は、早くから形成されているが、同時に聚るというのは、定着しがたかった。

この點に關して、さらに遡ってみよう。手がかりは、『高文擧珍珠記』である。これは、雙嬌齊獲どころか、富貴の妻とは恩愛關係が成り立ち得ないという點で、雙美奇緣の物語構造そのものが成り立っておらず、いわば「一夫兩妻」という點でのみ、關連している。この『珍珠記』の設定から連想されるのは、『琵琶記』であろう。唯一異なるのは、後から押しつけられた富貴の妻牛氏が、『珍珠記』の溫氏とは違って、糟糠の妻に同情的であり、夫と再會させるべく心を碎く點であろう。それ以外の設定は、極めてよく似ている。

『琵琶記』が、本來負心劇であった蔡伯喈戲文を大團圓に改編したことは、既に通説のようであるが、それによって、この作品は、結果的に「才子（生）—卑賤の妻（旦）—富貴の妻（貼）」という一夫兩妻のコンビネーションを作った。元から明に入ると、それまでの負心劇が、「不負心」の大團圓に改編されていく狀況を呈する。蔡伯喈と並んで著名なところでは、「王魁負桂英」があり、これも妓女桂英を棄てて富貴の娘と結婚した王魁が、不負心へと改編されてゆく經緯は、贅言を要すまい。

この負心・不負心を指標にした場合、ストーリー構成として中途半端な形態を呈しているのが、『永樂大典』所收の宋戲文『張協狀元』である。貧女（旦）の內助の功によって狀元に合格した張協は、丞相の娘王勝花（貼）との緣談を拒み通すのに、一方では糟糠の妻の貧賤を厭って、これを殺害せんとする暴擧に出るのである。貧女が王丞相に救われて養女となり、張協と復緣する過程は、『琵琶記』『荊釵記』と同じく、糟糠の妻の苦勞譚となる。

これらの作品は、いずれも、「才子（生）—卑賤の女（旦）—富貴の女（貼）」というコンビネーションを軸に、負心にも、夫婦の恩愛ものにも、雙美奇緣にもなりうる。構造的には同一であり、相似形の作品なのである。實際、ここに『荊釵記』を加えると、負心・不負心一通りの組み合わせは、明初までの段階で試みられていることが分かる。

・王魁負桂英—卑賤の女を拒み、富貴の妻を取る。

・張協狀元―卑賤の女を拒み、冨貴の女も拒む。
・荊釵記―卑賤の女を取り、冨貴の女を拒む。
・琵琶記―卑賤の女を取り、冨貴の女も取る。

もとより、ヒロインは、旦演じる卑賤の女であり、彼女の貞淑を稱揚し、後から押しつけられる冨貴の妻に對して正統性を持つためにも、早いうちから妻の座を確保することになる。こうして、物語は貞淑な糟糠の妻の苦勞譚を有す。

この『琵琶記』の「卑賤の妻（旦）―冨貴の妻（貼）」と、萬曆頃には形成されてくる「冨貴の妻（旦）―卑賤の妻（貼）」を比べると、單純に旦と貼の役柄が交替したわけではない。この轉換は、「卑賤の妻（旦）―冨貴の妻（貼）」のコンビネーションに、相對的に更に卑賤の妻＝妓女（貼）が導入されることにより起きた變化なのである。人物設定上、卑賤の妻（旦）の要素は、冨貴の妻（旦）に流入していくのである。

まず、貼演ずる女性よりも先に才子と結婚することであり、これは、旦と貼の脚色の屬性の違いにも基づくであろうが、結果として押しつけられた妻のお飾り的狀況を脱し、糟糠の妻の苦勞譚を形成しやすくなる點があろう。『玉環記』の張瓊英は、夫の留守中に、お家乘っ取りの騒動に巻き込まれ、あやうく實の父に殺されかける。結婚してから苦勞するわけである。萬曆期の『金雀記』や『四喜記』の「冨貴の妻（旦）」は、まだ『琵琶記』の牛氏的お飾りの妻の色合いが濃いが、『玉釵記』の「冨貴の妻（旦）」王瓊珍は、驅け落ち同然の結婚をし、才子佳人小説のヒロインと變わらぬ流轉の運命を辿る。『燕子箋』になると、結婚するまでの間に苦勞が滿載されており、これはもはや才子佳人小説のスパンと變わりはない。してみると、『玉環記』の張瓊英あたりが、糟糠の妻の苦勞譚を深窓の令孃の苦勞譚へと受け渡してゆく轉換點になりそうである。

從って、傳奇の雙美奇緣は、なかなか未婚の男女の雙嬌「齊獲」というわけにはいかない。そこには、糟糠の妻の苦勞譚、夫妻の恩愛譚の系統が、背景に流れているからである。そのため、同時に婚禮を擧げる代わりに、同時に「夫人」に封ぜられる「誥封二分」の趣向が、傳奇式の「齊獲」として機能したといえよう。

明の傳奇は、かなり早くから、妻妾の別のない「一夫兩妻」の才子佳人物語を釀成しはじめた。明末清初に至って、少なくとも現存の刊刻年からいえば、小説にやや先んじる形で、『燕子箋』のように、小説と類似した趣向の組み合わせ

による雙美奇緣物語が出現している。

本稿では、明末清初才子佳人小說との具體的な影響關係を分析するには至らなかったが、明末清初才子佳人小說の形成を考えていくとき、戲曲における才子佳人作品の形成狀況を展望していく必要があることを示唆しておきたい。

使用テキスト

- 『永樂大典戲文三種校注』（中華書局、一九七九）
- 『燕子箋・翡翠園』（明清傳奇選刊、中華書局、一九八八）
- 『元曲選』（中華書局、一九七八）
- 『古本戲曲叢刊初集～三集』
- 『雙忠記・高文擧珍珠記』（明清傳奇選刊、中華書局、一九八八）
- 『六十種曲』

〈注〉

（1）具體的な分析は、拙論「物語が終わるために—明末清初才子佳人小說の力學（『文學研究科紀要　別集第一三集』文學・藝術學編、早稻田大學大學院文學研究科、一九八六）、「神童の戀—明末清初才子佳人小說雜考—」（『中國文學研究』第十五期、早稻田大學中國文學會、一九八九）を參照されたい。

（2）大塚秀高『中國小說史への視點』（放送大學教育振興會、昭和六二年）に據る。

（3）孫楷第『中國通俗小說書目』（臺灣鳳凰出版社、一九七四）、大塚秀高『增補中國通俗小說書目』（汲古書院、一九八七）。

（4）路工『訪書見聞錄』（上海古籍出版社、一九八五）。

（5）臺灣學生書局、一九八六。

本稿は、一九九四年度早稻田大學特定課題研究助成費による研究成果の一部である。